

正しいことの難しさ

浜松市立積志小学校 五年 木俣 孝亮

この本を読み終えて、ぼくは想像した。もしクラスに真中さんがいたら、どうするだろう。正直このタイプ、苦手だ。主人公の目色ほど面倒なことやトラブルをさけて生きてきているわけではないけれど、これだけはつきり言いたい事を言われたらだれだって付き合いたくない。ぼくは、この本を読んで、正直であることは正しい事なのか、正しいとは何かを考えさせられた。

真中さんは、何でも正直に言う転校生。悪口を言っている人には「謝れ」と言うし、授業中にまわってきた手紙は絶対回さず本人に注意する。その性格のせいでクラスでもトラブルが多い。けんかやトラブルをさけて通ってきた目色は、真中さんが転校してきたことでもめごと巻きこまれる毎日になった。読み始めた時、ぼくは目色はただの弱い男の子だと思った。でも読み進めていくうちに、印象はガラリと変わった。目色はよく周りが見えていて、人の気持ち分かる男の子だった。そして人の気持ちによりそう優しさを持っていた。嵐君のキーホルダーが大切な物だと気づいていたのも、真中さんがいなくなった時教会にいると分かったのも、目色だからだと思う。そんな目色に真中さんが死んだお母さんの話、自分のせいでいじめられた弟の話をした。そして真中さんが正直でいる理由が、死んだお母さんとの約束だったことを目色は知る。ぼくも真中さんの無理をしているような正直さの理由を知って、納得できた気がした。

真中さんはいつも正しい。正しい事は言い返しにくいから、正直に全部伝えると相手を傷つけてしまう。この本の中で「お母さん、真中

さんをひとりにするみたいなの約束なんて、してないんじゃない？」と目色が真中さんに言う場面がある。ぼくも真中さんと似た経験をしたことがある。ぼくはサッカーをやっている。負けずぎらいのぼくは、試合中仲間につきつい言い方をしてしまうことがある。でも自分は間違っていた事は言っていない。伝えなければ、また同じ事をくり返すと思っていた。今までコーチや親に注意されても直せなかったのは、どこかで自分が正しいと思っていたからだろう。でもお母さんに「正しいければ何でも許されるのかな。正しい事って一つじゃない。その中で自分の気持ちを相手に分かってもらうには伝え方が大切だと思うよ。」と言われハツとした。ぼくは正直に正しいと思った事を伝えたくもりだったが、きつと相手に残るのは面白くない気持ちだっただろう。そうか、仲間にやりたい事を分かってももらい、次は一緒にがんばろうと思ってもらえなければ伝える意味がなかったのだ。

ぼくも真中さんも、正直さとは自分の気持ちの押し付けではないけない事に気づくことができた。真中さんは家族の所に戻ってがんばっている。ぼくも真中さんに負けないように、相手に分かってもらう努力を大切にしていきたい。

書名 チキン！
著者名 いとう みく
発行所 文研出版